

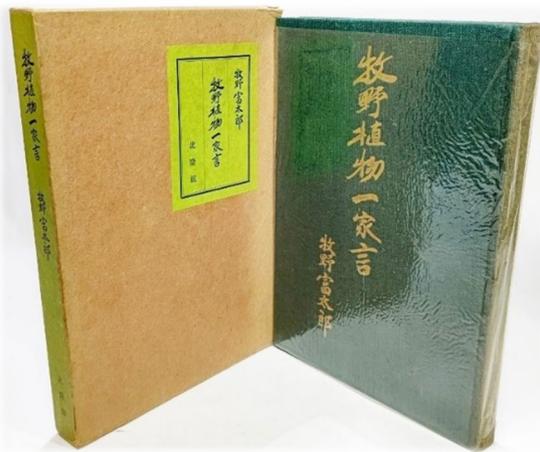
植物一家言

—草と木は天の恵み—

牧野富太郎

加藤良一 令和4年4月25日

『牧野植物一家言』は、牧野富太郎博士が書き溜めた植物に関する短い話題をまとめたものです。95歳で亡くなる前年の昭和31年(1956)1月に北隆館から発行されました。それが『植物一家言』として生まれ変わっています。



本著は、「最後の本草学者」といわれた牧野博士ならではの植物随筆です。草木に関する915にも及ぶ項目は、短く簡潔に書かれ、読みやすい形となっています。人間・牧野富太郎の植物に対する愛情が溢れています。自作の俳句も随所にちりばめられています。

忙しい研究のなかで、備忘録的にメモっていたものが大量に集まり、一冊の書籍にしてもよいほどになったとも思われ、個々の項目はほとんど何の関連もなく綴られています。

緒言には、次のように認められていました。

私は此頃少閑を盗んで、いろいろと、草木の事を書いて見た。而して、茲に大分溜まったので、今之を一冊の書物に著わして見る気になった。乃こで、之れを北隆館に頼んで、刊行して貰った。読者の諸賢に御高評を御願ひ致したいと思ひます。

昭和30年10月吉日 糸條書屋 結網學人 牧野富太郎

「結網學人」とは、「漢書」(前漢の史書)に由来しています。「臨淵羨魚之美不如退結網」。淵に臨んで魚を羨まんよりは、退いて網を結ぶに如かず。すなわち物事に臨んで手をこまねいているより、手段を見つけて、まず実行することを指し、牧野博士を終生導き、かつ文字通り実行したモットーとなっています。蔵書印には、ほかに「結網子」も使われていました。

また、晩年まで住んだ東京練馬東大泉の自宅書齋を「糸條書屋」と呼んでいました。

『牧野植物一家言』から半世紀近く経た平成12年9月、右の写真のような、読みやすく親しみやすいものとして大幅に改訂上梓されました。

元は文体が古く、現在では難解なものとなってしまうため、東京都立大学牧野標本館客員教授の水島うららさんが、現代文に置き換えるという多大な労力を費やして発行されたものです。

植物分類の専門ではない方々のために、植物学用語の注をつけ、それ以外にも、多くの漢語の解説も必要になり、予想以上に大変だったといえます。

橋本大二郎高知県知事が巻頭言として次の挨拶文を寄せています。

「我が土佐の偉丈夫・牧野富太郎博士の幻の書『牧野植物一家言』が現代の装いで新しくできあがりました。牧野植物園の開園一周年にふさわしい充実した内容で、感激もひとしおです。先生の愛された植物は、昔と変わらず今も美しく郷土を彩っており、多くの方がその本や草や花を楽しんでいます。先生が残された珠玉のエッセイの数々が、時空を超えて私たちに語りかけてきます。私も牧野博士になったつもりで楽しんでみたいと思っています。」



表紙を飾る川崎哲也氏の「やまもも」

新装なった『植物一家言』の表紙を飾っているのは、川崎哲也さんの描かれた「やまもも」です。川崎哲也さんについては、「川崎哲也『サクラ図譜』出版記念原画展を観る」([E-76](#))にも紹介しているので参考までにご覧ください。

川崎哲也さんは、サクラ研究の第一人者ともいわれています。昭和4年(1929)名古屋生まれ、宇都宮農林専門学校(現宇都宮大学農学部)卒業の後、教職(中学校教諭)につき、学生の指導にあたりながら吹奏楽部指導教官を長く務めました。そのかわら、牧野富太郎、サクラ品種収集家佐野藤右衛門の教えを受け、生涯を教職とサクラの研究に捧げ、サクラ栽培品種の鑑定家としても活躍し、平成14年(2002)に他界されました。川崎哲也さんの妹さんが筆者の合唱仲間新島聡幸さんの奥様新島依子さんです。兄の遺志を継いで、平成22年(2010)5月に原画展を開催しました。

多岐にわたる内容

以下にいくつか紹介しますが、たとえば、「土佐、佐川町辺のタンポポ」では、故郷の土佐に生えているタンポポはみなシロタンポポだが、たまに黄花のタンポポがあって、これはまことに珍しい、とだけ書かれているかと思うと、「キバナノセキコク」では、^{せきこく}石斛にはふつうのセキコクとキバナノセキコクの二種類あり、後者は高知の潮江山に産していたが、今でもあるか不明である、として故事来歴を述べたあと、自身が描いた精密な写生図を載せ、やや専門的な内容となっています。

また、思い入れもあるのでしょうが、土佐の植物に関する話題がけっこうあります。おおむね植物の名前の由来を説いたものが多いようです。

我々にとっても身近な「スマレ」については、花の形が大工道具の墨斗(墨入れ)に似ているところからの命名で、さまざまな方言があるといえます。スモトリバナ、キョウノウマ、ヒトヨグサ、ヒトハグサ、カギバナ、コマヒキグサ、コマノツマ、トノウマ、カギヒキバナ、ツボスマレ、キキョウグサなどです。

「シデザクラ」の項では、俳句を吟じています。

武州(東京都杉並区)大宮八幡宮(前に大宮が大箕谷と書いてあった)境内のシデザクラ(サイフリボク)満開の白花を^み睹て

してざくら神の御前のあかるさよ
神の御前ざいふりぼくの花浄よし

結網学人
同

ほかにもたくさんの俳句がちりばめられており、牧野博士が研究の合間に俳句を楽しんでいたことが窺われます。

女より好きは私の木と草と

結網学人

これを俳句といえるかどうか筆者にはわかりません。

Back

虫めがねTopへ

Home

Home Pageへ